

「今、家庭で必要な金銭教育」

— 第12回 — 講師：安藤絵理 静岡県金融広報アドバイザー

このコーナーでは、全国で活躍している金融広報アドバイザーによる誌上公開セミナーを行います。第12回の講師は静岡県金融広報委員会で活躍中の安藤絵理さんに、「今、家庭で必要な金銭教育」をテーマに、その方法やアドバイスを伺います。



子どもの自立に大切な金銭教育

子どもが自立した生活を送れるようになることは、親の願いですし、そのために必要な素養を身につけさせることは親のつとめです。子どもの自立に向けて親が準備すべきことはいろいろありますが、子の金銭感覚を養うことは、その中でも最も基本的なことの一つでしょう。一人暮らしを始めた途端に、他人からお金を借りてしまうようでは困りものです。限られたお金の中で計画的にやり繰りできるようにするためには、小さいころから訓練することが必要です。その前提として「お金の価値」について正しい認識を持つていてほしいものです。

ところが、私が普段行っているお金に関するセミナーなどで接する多くの子どもや学生から感じるのは、「これだけあれば何がどれだけ買える」という金銭感覚を持っている子どもが少なくないということです。この背景には、インターネットショッピングの普及や少額の買い物でもクレジットカードを使うことが普通になってきて、現金を目にす

ることが少なくなったこと、またおつかいに行く経験がないことなどが挙げられるでしょう。つまり、子どもたちがお金を実感する機会がどんどん減ってしまっているのです。こんな時代だからこそ、子どもが自分でお金を使う機会を意識的に作ることで、お金の躰をしっかりとすることが必要だと考えています。

子どもと積極的にお金の話をする

子どもに自分でお金を使う機会を持たせる場合に、「おこづかい」は、とても有効な教材です。「おこづかい」については、本誌でも既に何度か取り上げられていますので多くは説明しませんが、定額制のおこづかいとおこづかい帳を組み合わせれば、計画的にお金を使うことを学ぶことができますし、「貯めてから買う」という金銭感覚の基本を身につけるきっかけになります。仮に計画通りにいかずに失敗したとしても、親の管理が行き届く子どもの時期なら、「良い勉強」として捉えることができますでしょう。

ただ、家庭での金銭教育は、「おこづかい」に尽きるものではあ

安藤 絵理 (あんどう えり)

銀行保証会社、独立系ファイナンシャルプランナー会社に勤務後、1998年にCFP資格を取得し、2003年に安藤絵理FP事務所を設立して独立。現在は、個人コンサルティングのかたわら、金融機関研修講師、FP養成講座講師、セミナー講師のほか、TVやラジオ番組や雑誌コラムの執筆など、金融のプロとして幅広く活動中。2004年より金融広報アドバイザーに。2008年には金融庁および日本銀行より金融知識普及功績者表彰を授与されている。

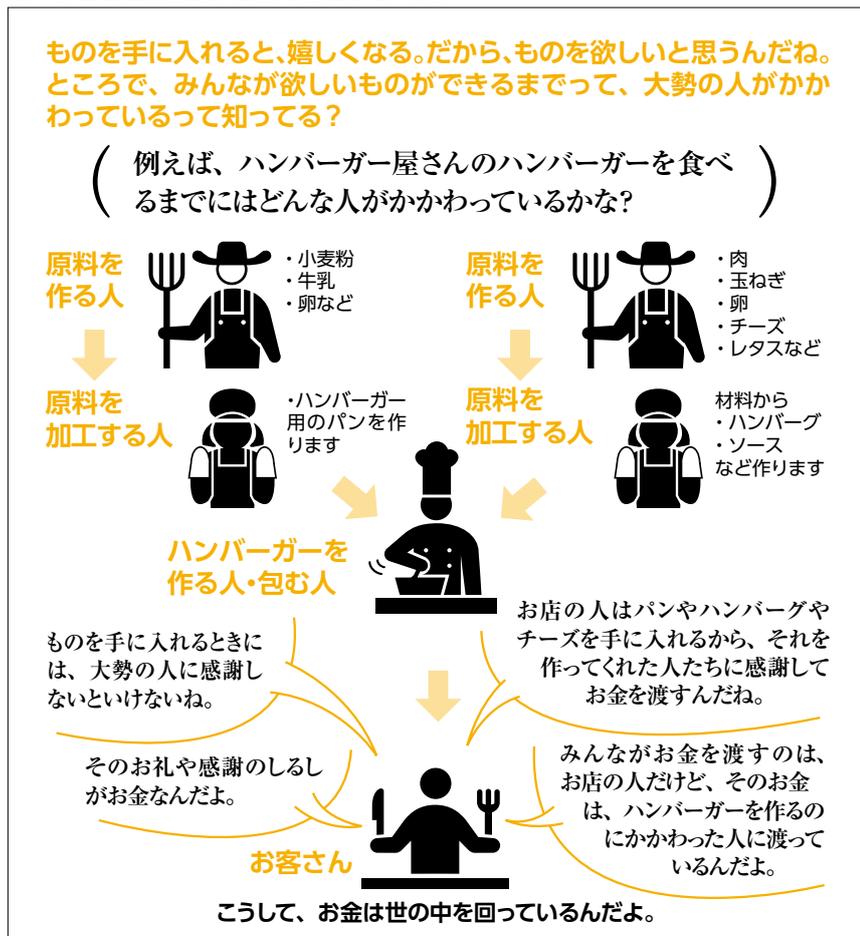
りませんし、「おこづかい」を渡し始める以前に必要なことだったりあります。それは、そもそも「お金とは何か」「お金はどうやって手に入れるか」といったお金に関する話を積極的に子どもにすることです。これは、子どもに「お金の価値」を理解させることにほかなりません。それは、子どもにどんなふうな話をすればよいのでしょうか。表にまとめました。

一緒に買い物をする機会を

「おこづかい」という教材を使うことのほかに、ぜひ取り入れていただきたいのが、親子で一緒に買い物に行く機会を多く持つことです。スーパーの中を歩きながらあらかじめ決めた予算の範囲で一緒に夕食の献立を考

【金融広報アドバイザーとは】金融広報委員会からの委嘱を受け、各地において暮らしに身近な金融経済等に関する勉強会の講師を務めたり、生活設計の指導や金融・金銭教育などを行う金融広報活動の第一線指導者です。

表：子どもと積極的にお金のお話を（例）



えるのも良いでしょう。やり繰りを相談する中で、いろいろな話が弾むはずですよ。

私のセミナーに参加してくれた子どもの中でも、普段、親と一緒にスーパーに買い物に行くという子どもは、そうでない子どもに比べて、「消費期限が迫っている食材は安くなっている。すぐに食べるならその方がお得」といった知識など、買い物をする

るうえでいろいろなコツを身につけていました。一緒に買い物をするのは、お金を使うときの姿勢や考えを教える実践的な場になるのです。少し大きい子であれば、「安価ですぐにダメになってしまふもの」と「高価でも長く使えるもの」のように、同じ商品でも価格の違いには理由があって、どういう視点でものやサービスを選択すべきかを

買物現場で伝えていく。これこそ、子ども時代に育みたい価値観です。

「子は親を映す鏡」といわれますが、本当によく親を見ています。親が率先して浪費の種をまくことなく、お金を使うべきところと節制すべきところを示しながら、正しくお金を使う姿を見せてあげてください。

お金の躰は質問を投げかけて

子どもですから、時にはおねだりをする事だってあるでしょう。いつでも欲しいものが入る環境で育つと、大人になつたときに、限りある収入のなかで優先順位をつけてやり繰りするのではなく、安易に「今お金がなければ借りて買えばいい」という発想に陥りがちです。やはり、「お金の躰」は重要です。ただ、ここで大切なのは、「大人の考えを一方的に押し付けてはダメ」ということ。すぐに答えを出さず、対話をしながら子ども自身が納得のいく答えを導き出していった方が、「欲しい気持ち」をコントロールできます。

例えば、子どもは欲しい物があるときによく、「みんな持って

るから買って」と言いますね。でも、よくよく聞くと決して「みんな」じゃない。「せがんで買ってもらったけど、結局使わなかったものはない？」と問いかけると、少し冷静になって我慢する気持ちを持てるようになります。ただ「我慢しなさい」と言うのではなく、「質問を投げかけ、考えさせる」というやりとりによって、子どもたちの考える力、判断する力を養うことができるのです。

今回のまとめ

- ★金銭感覚は子どものうちからでないと育ちにくい
- ★家庭内のコミュニケーションを頻繁に
- ★子どもに問いかけ、考えさせる

このように普段からお金の話をすること、その家庭のお金に対する価値観、食べているもの、身につけているものの価格や価値、身の丈に合った金銭感覚が培われていくのではないのでしょうか。それが、将来の自立に向けての準備となることでしょう。